

機関番号：12501

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20520407

研究課題名 (和文) 現代日本語の「とりたて」の範囲と成立条件に関する研究

研究課題名 (英文) A study on semantic conditions for TORITATE adverbs sentences and classifying into these adverbs

研究代表者

安部 朋世 (ABE TOMOYO)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：00341967

研究成果の概要 (和文)：本研究は、とりたて副詞について、「選択指定」「おもだて」「比較選択」に分類されるとりたて副詞を中心として分析・考察を行い、それぞれの表現形式がとりたて表現と解釈される条件を明らかにした。また、とりたて副詞に分類される表現形式それぞれの分類の妥当性についても指摘を行った。本研究によって、これまでとりたて助詞に比べて立ち後れていたとりたて副詞研究に一定の成果を得ることができた。

研究成果の概要 (英文)：In this study, I investigated TORITATE adverbs classified into SENTAKU-SHITEI (choosing as specifics), OMODATE (choosing as main things), and HIKAKU-SENTAKU (alternative choosing). This analysis revealed the generalization of the semantic conditions of their occurrence. In addition I examined the validity of grouping TORITATE adverbs. Prior to this study, relatively little research had been directed towards TORITATE adverbs. This study contributed to the analysis of TORITATE adverbs.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	300,000	90,000	390,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1400,000	420,000	1820,000

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：言語学、日本語学、とりたて、副詞、助詞

1. 研究開始当初の背景

(1) とりたて研究は、日本語研究の重要な研究テーマの一つである。例えば、2007 年 10 月に開催された日本語文法学会第 8 回大会のシンポジウムにおいても、「とりたて研究の可能性」がテーマとされ、活発な議論が展開されている。

(2) しかし、そこでの議論でも明らかなように、「とりたて」の範囲—すなわち「とりた

て助詞」を一つのカテゴリとして認めるか否かという問題や、そもそも「とりたて」とはどのようなものなのかという問題について、未だ一定の見解が得られているわけではない。これまでの「とりたて」研究は、主として「ダケ」や「サエ」といった「とりたて助詞」を中心に進められたものであるが、多くの有益な成果が得られた一方、上記のような問題を抱えたままの状況であるということになる。

(3) 上記の問題を解決し、「とりたて」とは如何なるものか、ということをは明らかにするには、同じく「とりたて」表現に分類される「タダ」や「セイゼイ」といった「とりたて副詞」についての研究を進める必要がある。

(4) これら「とりたて副詞」については、いくつかの研究がみられるものの、詳細かつ網羅的な研究とは言い難く、「とりたて助詞」に比べ研究が立ち後れているという状況があった。

(5) よって、本研究の研究代表者は、「とりたて副詞」の意味用法を整理分析し、「単ニとタダ」(『千葉大学教育学部研究紀要』52, 2004年)「副詞トクニ・コトニ・トリワケの分析」(『千葉大学教育学部研究紀要』54, 2006年)等、「とりたて副詞」の研究において一定の成果を上げてきた。その一部は、科学研究費補助金(若手研究(B)・課題番号:16720102)による研究で得られたものである。

(6) 「とりたて」研究を進めるために「副詞」にも視野を広げるべきである、ということは、先のシンポジウムにおいても指摘されている。「とりたて副詞」をも視野に入れて「とりたて」研究を行うという申請者の研究の方向性は妥当なものと考えられる。

(7) 一方、本研究の研究代表者の「とりたて副詞」に関する一連の研究においては、次のような課題も明らかになった。すなわち、これまで「とりたて副詞」とされてきた表現形式の中には、「とりたて」以外のものが混在しており、「とりたて」の範囲が明確ではないという点である。

(8) 例えば、「タダ」のように、接続表現の用法と「とりたて」表現の用法の両方を担う表現形式がみられることや、「セイゼイ」のように、程度・量を表す修飾用法と「とりたて」用法の両方を担う表現形式がみられること、さらに、「タカガ」のように、「とりたて」機能を有するとするには問題のある表現形式があること等である。

(9) よって、本研究では、副詞類を中心として、「とりたて副詞」に分類される表現形式のみならず、それらと類似する意味を有する表現形式をも対象とし、その用例を網羅的に抽出・分析するとともに、近接する他の副詞的表現や同様の意味に解釈される「とりたて助詞」との比較を通して、現代日本語の「とりたて」の機能を担う表現形式の範囲と、「とりたて」の意味が生ずる条件を明らかにすることを目的とするものである。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、現代日本語の「とりたて」の機能を担う表現形式の範囲と「とりたて」の意味が生ずる条件を明らかにすることである。具体的には、次の点を明らかにしていくことになる。

① 「とりたて」や副詞的表現に関する先行研究の成果を踏まえながら、とりたて副詞と近接する他の副詞的表現とを比較し、その共通点や相違点を明らかにする。

② 上記の成果を踏まえ、さらに、「とりたて」についてのこれまでの研究成果も取り入れながら、「とりたて」の意味が生ずる条件を明らかにする。

(2) 本研究の研究代表者は、日本語における「とりたて」の体系化を目指し、これまでに、「とりたて助詞」のみならず「とりたて副詞」をも視野に入れて「とりたて」研究に取り組んできた。本研究は、こうした一連の研究成果を踏まえ、「とりたて副詞」を他の副詞的表現と比較するという、「とりたて」の体系化に向けた新たな段階に位置付けられる研究課題として設定されたものである。

3. 研究の方法

(1) まず、「とりたて」に関する先行研究を入手し、「とりたて」研究の先行研究の成果を把握し、問題点を抽出する。

(2) 電子化資料等を入手し、それらを活用してとりたて副詞についてのデータを収集する。

(3) さらに、とりたて副詞に類似する意味を有する副詞的表現にも視野を広げ、データを収集する。

(4) 先行研究の成果を踏まえ、収集したデータをもとに、とりたて副詞とそれに類似する意味を有する副詞的表現との比較分析を行うことで、とりたて副詞の範囲と成立条件を明らかにしていく。

4. 研究成果

(1) まず、とりたて副詞のうち「選択指定」に分類される「マサニ」を中心とし、マサニを類似した意味を有すると考えられるマチガイナク・タシカニ・ホントウニと比較した結果、以下の点を明らかにした。

① 「AマサニBダ」におけるマサニは、話し手がAにあてはまるものとしてBを評価的に捉えていることを示す。

② 「AハBダ」と判断する際、タシカニ・ホントウニは、先行する文脈等に示される話し手（読み手）以外の判断内容に照らし合わせて判断しているのに対し、マサニではそのような先行文脈は問題とされていない。

③ マチガイナクには「話し手が当該の内容を評価的に捉えていることを示す」という制限はないこと、タシカニとホントウニとの違いには、後者が「AハBダ」と考える度合いが強いことが挙げられる。

④ さらに、マサニと総記のガ、とりたて助詞のコソとの関連についても指摘を行った。

(2) 次に、とりたて副詞のうち「おもだて」に分類される「オモニ」を中心とし、それと類似する意味を有すると考えられるトクニ・コトニ・トリワケとを比較分析した結果、以下の点を明らかにした。

① まず、オモニと、同じくとりたて副詞に分類されるトクニ・コトニ・トリワケとを、とりたてられる要素である「当該要素」、それと対比される「他の要素」、それらを要素とする「前提集合」の3者の関係に注目して比較分析した。その結果、トクニ・コトニ・トリワケは、「当該要素も他の要素も、ともに前提を満たす（肯定される）要素として肯定的に捉えられている」ことを前提として、「当該要素が前提を満たすものとして顕著である」と捉えられているのに対して、オモニでは、他の要素も当該要素とともに「前提を満たす（肯定される）要素」として捉えられているものの、「他の要素は肯定されてはいるが否定されるに等しいもの」と捉えられている点を指摘した。

② また、トクニの「特別に」用法とオモニの違いとして、トクニの「特別に」用法では、当該要素以外の他の要素が否定されるのに対し、オモニは「他の要素がないに等しい」が、全く否定されるわけではない、という点を挙げた。

③ さらに、「概略・概括的な程度量の副詞」とオモニとの違いについて、前者が程度量を示すものであるのに対し、後者はとりたての特徴である「当該要素と他の要素との関係」によって捉えられるものであることを指摘した。

(3) 最終年度においては、とりたて副詞のうち「比較選択」に分類される「ムシロ」「ドチラカトイエバ」を中心とし、ムシロ・ドチラカトイエバに類似した意味を有すると考

えられるカエツテと比較考察を行った結果、以下の点を明らかにした。

① まず、ムシロとドチラカトイエバについて、両者を比較考察した。その結果、ムシロは、〈前提集合〉の要素が「前提を満たす要素として想定されやすいか否か」という価値判断を有する要素として設定されるのに対し、ドチラカトイエバは、〈前提集合〉の要素がニュートラルな関係で提示されるものであること、また、先行研究において「述べられる行為や状態の実現についての蓋然性に関する判断を担う」とされる「絶対」等の副詞類と意味的に近い関係を有する点を指摘した。

② 次に、カエツテについて、「予想される結果—それとは逆の事態」という関連が読み取れる文脈が必要であることを確認した。これは、「何らかの設定において想定され得る結果・結論のうち、「その設定から最も妥当なものとして導かれるか否か」という価値判断を含む〈前提集合〉である」と記述できることを表していることになる。よって、カエツテがとりたて用法を有する、具体的には、何らかの設定において想定され得る結果・結論のうち、「その設定から最も妥当なものとして導かれる結果・結論」と「その設定からは導かれまいと考えられる結果・結論」から成る〈前提集合〉の中から、「その設定からは導かれまいと考えられる結果・結論」を〈当該要素〉としてとりたてるものとする記述が可能であることを指摘した。

(4) このように、本研究において、主としてとりたて副詞の研究において一定の成果を上げることができたと考えているが、一方、次のような課題も見えてきた。すなわち、これまでの研究は、類似する表現形式の比較を通じた分析が主であったため、とりたて表現の意味に関する分析に偏ってしまった点である。

(5) 本研究における最終的な目標は、現代日本語におけるとりたて表現全体の構造と機能を明らかにすることである。それにはとりたて副詞ととりたて助詞の両方の分析が不可欠であり、それらの関係を明らかにする必要があるが、意味の面からの分析だけでは、類似する意味を有するとりたて副詞ととりたて助詞との相違点が明確に捉えられない。

(6) 異なる品詞でありながら「とりたて」として働くとりたて副詞ととりたて助詞が、文中においてそれぞれどのように機能しているのかを考察するためには、それぞれの出現位置や構文的特徴に加え、両方の表現形式が

一文に同時に現れる際に、それぞれがどのような振る舞いをしているのかを明らかにする必要がある。

(7) また、近年、とりたて助詞を中心とするとりたて研究のまとまった成果が出ていることから、それらの先行研究も踏まえ、とりたて副詞ととりたて助詞との関係を明らかにする必要が生じてきたことも、課題として指摘できる。

(8) よって、今後は、これまでの研究成果を踏まえ、とりたて副詞ととりたて助詞について、構文的特徴の分析を網羅的かつ詳細に行い、構文と意味の両面から両者の関係を分析することで、とりたて表現全体の構造と機能を明らかにしていくことがテーマとなる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①安部朋世、ムシロ・ドチラカトイエバ・カエツテの分析、千葉大学教育学部研究紀要 第59巻、査読無、2011、pp. 241-245
- ②安部朋世、副詞オモニの分析、千葉大学教育学部研究紀要 第58巻、査読無、2010、pp. 311-315
- ③安部朋世、副詞マサニの分析、千葉大学教育学部研究紀要 第57巻、査読無、2009、pp. 297-301

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安部 朋世 (ABE TOMOYO)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：00341967